「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成２３年度「知事とみんなの愛顔（えがお）でトーク」知事講話

平成 23 年 6 月 9 日（木）
於：今治市総合福祉センター

○はじめに

今日は、「愛顔でトーク」にご参加いただきましてありがとうございます。これは、東・中・南予で各年２回開催させていただくことで、県政の方向性について、或いは皆さんからのご意見をいただき、皆さんとの接点を持つことによって、施策に生かしていこうということから開催させていただいております。限られた時間ではありますがどうぞよろしくお願いします。

昨年の１２月１日までは、１２年間松山市長を務めさせていただきましたので、地方行政については、それなりの経験をさせていただきました。県政という舞台になりますと、基本的なところについては共通部分もありますが、広域的な取組み、或いは国との折衝ということについて違ったジャンルが広がっていますので、その点、今までの経験が生かせる部分と新しく学ぶ部分とを持ちながら、この６ヶ月を歩ませていただいたところです。

その間、３月１１日に東日本大震災という痛ましい出来事が起こり、自然災害とはいえ多くの犠牲が出ました。被害がなかった地域だからこそやらなければならない立場、やるべきことがある立場に立ち、この３ヶ月間は、被災地への支援にも力を注ぐ必要があるという、これは、ある意味では初めての経験であり、色々なことを模索しながら突き進んで来た月日でもありました。

○地方分権について

松山市長時代から、当時は、松山市民の皆様に、このままの構造では、この国はもう立ち行かなくなるのが見えている。だからこそ、その時に備えて様々なチャレンジを一緒にしていただけませんかという呼び掛けをして参りました。今から１５年前、当時は私、国会に議席をいただいていましたが、国の借金の残高は、200 兆円を超えるか超えないかという時代でした。この 200 兆円を超えてしまったらもう歯止めが効かなくなり、坂道を転げ落ちるように行ってしまうぞという議論をしていたのが、たかだか１５年前です。その時 200 兆円をぎりぎり超えないで、198 兆円位の国債発行残高だったと思う。あれから１５年の月日を経て、現在、その金額はもうすぐ 900 兆円に

手が届く所まで来ています。いつまでもこんな状況が続けられるはずがない。しかし、悲しいことに、この国において、どうすればこの問題を解決出来るか、無難に着地出来るか、明確な答えを持っている霞ヶ関の役人も、政治家も一人もいません。何とかなるのではないかと、当面気付いた所だけ、これ以上悪化しないように手を付けるのが精一杯というのが今の実情です。そんな中から生まれ出てきた政策が、三位一体の改革でした。最初聞いた時、良い事をしているなと思いました。国から地方に権限と財源を移譲する、これは地方分権と言っていますが、実は、この地方分権がささやかれ始めたのは、もう十年も前です。これには、二つの理由がありました。その一つは、今申し上げた、国の方が、借金がどんどん膨れ上がってしまって、今までは、福祉も教育も産業政策も安全安心政策も、全てを国が決めて、地方はそのメニューを見て自分のまちに見合ったものを選択するということで済んで来たのが、このメニューを作る余力が、もう国にはなくなり、地方のことは地方でやってくださいという後ろ向きの動機から地方分権が必要だと言われ始めてきたこと。今まで何もかも国が決めて、予算の時期になると江戸時代の参勤交代のように、ぞろぞろお江戸に行って頭を下げるのが常態化しており、こんな気持ち良い権限を手放してなるものかということで、なかなか崩せなかったのが、国のマイナス面、財政事情から来るこれ以上出来ないということ。一方、地方では、地域のことは我々が頑張ってやりますよという、その地域にしかない歴史や文化をふんだんに使ったまちづくりにチャレンジしたいという前向きなエネルギーが彷彿として沸き起こっていたということ。国においてはマイナスのエネルギー、地方においては、そのまちらしいまちづくりをやるんだというプラスのエネルギー、それが不思議なことに方向性としては同じ地方分権に向いて、一気にこの課題が俎上に上るようになった訳です。

　ところが、三位一体の改革で行われたことは何だったのかと言うと、確かに、国から地方に一定の財源が移りました。３年位前に、所得税が下がって住民税がその分上がったことがありますが、実は税源を国から地方に移すという作業でした。所得税は国に、住民税は地方に入ります。国に入るものを１０から５にし、５であった住民税を１０にする。支払う側の負担は変わらないが、国に入るか地方に入るか行き先が変わったということです。これで、地方が自由に使えるお金が増えたように見えます。実際、国から地方に２兆４千億円の財源が移されました。ところが、それに見合う形で補助金がバッサバッサと切られました。切られた金額が、２兆４千億円ならば全く問題がなかったのですが、蓋を開けると実際起こったことは、切る方は３兆６千億だったんです。この差額１兆２千億円は何になったかと言うと、どさくさに紛れて、国から地方への借金の付け替えが行われたということです。これでは、地方はひとたまりもない。まず表面化したのが夕張市の倒産です。これを乗り越えるために地方は踏

ん張りました。これを受け止めて何とかしなければならないということで、本音のところは分からないが、そのまま故郷が残った方がいいという声が圧倒的だったと思いますが、生き残るために踏み込んだのが市町村合併でした。今治でも、１２という多くの自治体が合併したのです。松山市も当時、２市１町が合併しました。生き残るための選択でしたが、このことにより 3,300 あった市町村が、今 1,800 しかありません。1,500 の市町村が消えました。これに伴って、市長さんや町長さん 1,500 人は、まちの生き残りのためにお辞めいただいたことになります。議員さんも、当時地方議員が６万人全国にいましたが、現在３万８千人ですから、２万２千人の地方議員さんは、まちの生き残りのために去って行かれました。一方で、国から肝心の仕事は全然下ろしてくれないが、どうでもよさそうな仕事が、地方分権ですよということで降りて来ました。地方は仕事が増え、仕事が増えた側が、市町村合併をやって頑張っている。ところが、仕事を渡したことにより仕事が減っている国は、どうでしょうか。地方公務員は、この１０年間で１２％減っていますが、国家公務員はこの１０年で２％しか減っていません。地方議員は２万２千人いなくなりましたが、国会議員は一人も減っていません。どう考えたっておかしいです。その結果が、今、我々の目の前で開かれている国会の風景にも現れているのかもしれません。今、やるべきことがたくさんあります。東日本大震災でも、原子力発電所の事故も止まっていませんし、復旧から立ち直っている所があるかと言えばそんなこともない。日々、明日はどうなるのかという不安の中で暮らしている方がたくさんいらっしゃる時、その目の前で不信任案が出され、それだけで５日間が費やされています。それが、多くの人の目にどのように映るのかすら分からなくなってしまっている現状を見た時、私はコメントを求められ、「出される方も出される方だが、出す方も出す方でコメントする気にもならない。」という本音を申させていただきました。余計に、これから地方は、自分達の足で立って、自分達のまちは自分達で作っていくんだという気概が必要で、これは挑戦でもあります。バラ色ではありません。気概を持ち責任を持つことが伴って来ますから、大変なことかもしれませんが、そこに踏み込んで行くしか明日はないという気持ちで頑張っていきたいと思っています。

○「愛顔（えがお）」について

　ただ、そうは言っても未来を考えていく訳ですから、楽天的になる必要もあります。松山市長の時に追い求めた坂の上の雲のまちづくりは、まさにそんな力を与えてくれました。明治という時代、農業と絹くらいしか産業がなかった時代に、日本という国が国際社会の中に一歩を踏み出して行く。当然のことながら苦労の連続です。列強の脅威に直面し、その中で無謀にも、立つか立たざるかという時に、立つという道を選

んで、日露戦争に巻き込まれて、もう国がなくなってしまうかどうかのギリギリの所に、あの時代の人達は立たされていたにも関わらず、明日を信じる気概を忘れずにひたすら坂の上に浮かぶ雲を目指して坂道を登って行くという、そんな黙々とした力強いあゆみを続けて行った訳です。その後の歴史は、また違った展開を見せますが、司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」のあとがきに書かれている文章は、本当に自分にも印象的でありまして、こんな言葉があります。「この物語は、滑稽なまでに楽天的な連中の話である。彼らはそのような時代人としての体質で、前をのみ見つめながら歩く、のぼってゆく坂の上の青い天にもし、一朶（いちだ）の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて坂をのぼってゆくであろう。」という言葉で結ばれています。そんな気概を持ってまちづくりに挑戦したいなというところから考えたのが、「えがお」という言葉でした。この「えがお」という言葉は、「笑顔」という文字ではなく、愛媛の「愛（え）」と「顔」とで、自分で勝手に作ってしまったのですが、その思いは、明日を信じる気概を持つ人間は、いかなる困難を目の前にしても、前向きな気持ちから生まれる笑顔を忘れないということ。これは「坂の上の雲」を通じて学んだことですが、そこから浮かぶ笑いの顔と、世の中に幸せを提供する大きな要因は、思いやりであり、支え合いであり、そういう所にあるのではないか、これからますます大事になって来るのではないか、その根本にある思いは何だろう、それは愛という言葉ではないか、ということを考えている時に、そう言えば「愛」というのは、愛媛の「え」の字で、「愛」で「え」と読むから「愛」で良いやというようなことで作り出したのが、「愛顔」という言わば前向きな気持ちと、思いやりの気持ちとを持って生まれる笑い顔という風に捉えていただけたらと思います。

○本県の特色について

　さて、愛媛県のことについて、少し触れさせていただきたいと思います。私は、松山市長時代、県下の市長さんや町長さんとの交流、或いは、それぞれの地域への訪問を通じて、ある程度のことは知っているのではないかと思ってきました。ところが、今この仕事をいただいてから、東予や中予に足を運んで、全くそれは錯覚で、知らないことだらけということを痛感する日々を送っています。それと同時に、何とまあ魅力ある素材が、全県下に広がっているのだろうと、そして、それが知られていないということを含めて発見の毎日です。愛媛県は、ご存知の通り、東・中・南予という地域に分かれていて、かつ、非常に特徴的なのが、それぞれのエリアによって、主要産業が違うということです。もちろん、どの地域も第一次産業、第二次産業、第三次産業がありますが、主要になっているものが違う。例えば、中予の松山圏域は、そんなにたくさん工場がある訳ではない。人口だけは５２万人、周辺を入れると６７万人、

四国最大の商業都市という位置付けになります。自ずから第三次産業、サービス業に携わる方が７０％以上です。第三次産業が中心の消費都市、商業都市、情報発信都市、こういった位置付けが中予になります。南予に行くと、皆さんご存知のとおり、海・山・自然がありのままに残っているエリアで、そこで育まれる、農業あり、水産業があり、真珠の養殖業があり、こうした第一次産業が中心のエリアになっています。

○東予地域について

そして、東予は、この今治市なら造船とタオル、お隣の西条市に行けば電機や化学製品の工場、新居浜市は住友発祥の地として、化学や重機や林業や鉱山、こうした住友の中核企業が柱になって企業城下町を形成している。そして、四国中央市に行くと紙・パルプ、こちらにもティッシュや紙おむつ等様々な分野で大きな会社が林立しています。ここで一つ驚いたことがあります。松山市は人口が５２万人ですが、一年間の工業生産高を見ると、平成２０年度のデータで、松山市は、年間大体 4,500 億円(21 年度は約 3,600 億円)です。四国中央市は人口約１０万人ですが、約 6,800 億円(21 年度は約 6,100 億円)です。松山市より大きいことにびっくりしました。隣の新居浜市に行きましたら約 7,300 億円(21 年度は約 5,500 億円)です。そして西条市は約 8,500 億円(21 年度は約 6,800 億円)。皆さんが住んでいる今治市は１兆円を超えています。(21 年度は約 9,200 億円)。造船とタオルが中心になって四国最大の工業生産高をあげています。廻ってみて一つ気付いた事は、東予は、これまで業種別に工業がきっちりと歴史を刻んできたが、それぞれの主力企業の下に、その企業を支える高い技術力を持った中小企業がいっぱいあるということ。紙の産業を支える色んな中小企業の技術がベースにあるということ。新居浜市も、造船もそうです。しかし、その中小企業については、横の連携がほとんどない。紙は紙、船は船、タオルはタオル。でもこの情報が共有されて接点が生まれることによって、異業種の技術が思わぬ副産物を世の中に生み落とすことがあります。これだけの産業、そのほとんどが、紙・パルプも造船もタオルも日本一ですが、それだけのものを支える中小企業のネットワークやデータベースがあることによって、新しい展開の模索が出来るのではないかということで、愛媛県では今年から、その情報を集める作業をスタートすることにしました。金融機関にも知恵を借りて、データベースの作成作業に入っています。それが出来たら、当然のことながら、インターネットを活用したり、或いはその情報を持って、私自身が、東京、大阪を中心とした県外の企業に、愛媛の技術というものの売り込みを掛けようと思っています。その時、興味がある会社がもし出てきたら、全て県庁が窓口となって民間企業に繋いでいくという仕組みを作り上げることが出来たらと思っています。

○しまなみ海道について

東予については、もう一つ、ある意味世界に誇れる魅力になり得ると思っているのが、しまなみ海道の存在です。どう使うかということを考えていかなければならないと思っていますが、しまなみ海道というものを活用して、人を引っ張って来ることを考えた時に、連携相手との関係を強めていく必要があると感じました。その相手とは、広島県です。広島と愛媛のジョイントによる情報発信力の強化と、お互いの資本を投入することによって効果を出すこと、つまり費用対効果です。こうしたことを考えると、この連携はどうしても必要だと感じます。すでに広島県の知事とは話をして、すぐにという訳にはいきませんが、２、３年という月日をかけて大きな仕掛けをしていこう、しまなみ海道を活用した今治圏域の活性化プラン（広島県側には広島県側のプラン）を考えたいということで準備作業をスタートすることでは合意が出来たところです。恐らくキーになるのは、自転車という切り口だろうと思います。松山市長時代に台湾との交流に切り込んで行ったことがありますが、その時に、アジアの国々では、空前の自転車ブームが起こっていることを実感しました。自転車で、気持ちよく走れる所だったら、世界中に飛んで行く人達が世の中にはいらっしゃる。数ある自転車メーカーの中で、アジアで圧倒的な力を持っているのが、台湾のジャイアントという自転車メーカーです。そのジャイアントの皆さんが、しまなみ海道にものすごく注目しています。世界中を見回しても、自転車で走るのに「これはいい。」という所はいくつかあるが、人工物の中ではしまなみ海道が最高の場所だと我々は思っていると、そこまで言い切っていました。ただその仕掛けをするには、当然迎え入れる準備が必要です。去年、しまなみ海道を家内と行って、自転車を借りて、「気持ちええなあ。」と言って自転車で橋を行くと、真ん中辺りに料金箱がある。自転車の場合ですが、橋の中に料金箱があるような国は日本だけです。道路交通法という法律でそうなっていると。今までも、今治市長さんも、松山市長の立場で私も、何度となく掛け合ったことがあります。これは恥ずかしいから、せめて自転車は無料にすべきではないかと。しかし、法律がこうなっているからということで、ことごとく跳ねられてきた経緯があります。しかし、まだ諦めてはなく、この前も、しつこく言ってきたところで、こういった問題を片付けなければならない。それから、世界の人を引き付けるということになると、片側を一日止めるくらいのことはしなければ、自転車のファンは絶対に来ないということになります。逆に言えば、しまなみ海道は、世界のアマチュア自転車の聖地みたいな位置付けに育て上げられる可能性があるということでもありますから、そんな夢を追って行きたいなと思います。いずれにしても、その地域の活性化の道筋は、おおよそ２つしかなく、一つはそのエリアで何か物やサービスを作って外に向かって売ってお金を稼ぐか、もう一つは外から人に来ていただいて、お金を落としてもらうか、

究極的には、この２つですから、何がそれぞれのエリアに相応しいかということを考えながら追い求めていきたいと思います。

○柑橘について

　東予の話から飛びますが、南予でも、今、第一次産業は大変です。でも可能性は、どこにでもあると感じています。例えば、宇和島市吉田町の県みかん研究所という所では、どうやって今の人たちに受け入れられる味が出せるようになるか、その味を出すにはどういう品種を作ったら良いかを研究しています。ポイントは３つあって、「味のよさと」「食べやすさ」と「作りやすさ」。生産者の立場も大事ですから、この三つの視点で研究を続けています。そして、そこから次から次へと色々な品種が生まれてきました。かつて、愛媛県はみかん王国と言われていました。ところが、先週の新聞でも、何でそういう書き方になるのか分からないけれども、「またまた温州みかん、和歌山県に次いで２位」という記事が出ていました。でもあれは違うんです。確かに、温州みかんでは、和歌山県が一位で愛媛県が二位の生産高になっていますが、愛媛県の場合は、温州みかんでも良いものがたくさんできていますが、温州みかんだけでは将来に限界があるということで、季節を越えて作れる、或いは高付加価値型のものを追い求めていくということで、中晩柑、晩柑類の展開を強めてきました。だから、温州みかんのシェアが減った分、中晩柑、晩柑類が増えたということで、柑橘全体でみたら、和歌山県なんか比ではないです。ちなみに柑橘全体で見ると、和歌山県は２３万トン、愛媛県が３２万トンですから、どちらが王国かということは一目瞭然です。ただその中で、温州みかんだけとったら和歌山の方が多い。和歌山県は、中晩柑、晩柑類はほとんど作っていませんから。せめてマスコミの皆さんも、温州みかん２位は事実ですから良いですが、「温州２位だが依然柑橘王国」と書いてくれたら、みんな元気になる。ちょっとした言葉の問題で、空気が変わってくると思います。物事を見る時も、粗捜しする所からはマイナスのエネルギーしか生まれなくて、ここをこうしたらもっと良くなるという発想で物事を考えていくようにすれば、プラスへプラスへ持っていくことが出来、そこに、エネルギーが生まれて来ますよという話を、職員によくするのですが、その結果として、例えば、１２月には、紅まどんなという品種が生まれ、２月には、せとかや甘平という新しい物が出てきました。そして今の時期は、カラマンダリンから清見、温州はもちろん。５月以降になると晩柑類が出始めます。美生柑、愛南ゴールドといった品種も市場では高い評価が出てくるようになりました。東京辺りに行きますと、紅まどんなは、１個千円以上で売られています。とてつもない値が付いています。今はまだ、作りやすさという点で課題がありますが、そういったものも増えてきていますから、必ずやこの柑橘王国という攻め口、しかも、これだけ

の品揃えがあるのは全国で愛媛しかない。愛媛の総力で、柑橘関係はまだまだ延びる余地ありというところで戦術を考えていきたいなと思っています。

〇養殖について

養殖、これも実は日本一です。養殖と言えばタイやハマチですが、この前南予に行った時に、こんな話をしました。発想を転換しましょうと。寿司屋に行ってお品書きを見た時に、「天然」と書いてあると「おおええなあ。」と思ってしまうことはないですか。魚の世界では「天然」だと高級というイメージがあります。ところが、肉の世界では逆です。肉の世界は、一つの農家が愛情を込めて、安全な餌をやり続けて、大事に大事に育てた養殖牛が高級ブランドです。何故こうなったのか、それは、恐らくずいぶん昔に、今はそんなことはないのですが、養殖業にホルマリンを使ったとか、色々な記事が全国に出たことがあって、養殖は、何か危ないのではないかというイメージが、自然に広まってしまった結果なのかなと思いました。でも、よくよく考えると、今世界中で、漁獲制限も当たり前になってきた、海の汚染もあるが自然魚がどこを回遊して何を食べているのかも分からない、安全安心の面からみても、いよいよこれから、魚は養殖でしょう。農業と同じように、例えば、養殖で育てた人の顔が見えて、バーコードに飼育記録がしっかりと載っているとか、そこまでやると全然違ったものとしてブラント化出来るのではないか、そのために、極端な話、「養殖」という言葉が、天然より下というイメージが日本中に広がっているであれば、愛媛県の場合「養殖」という言葉を使うのは止めようという発想が必要なのかなという話もしたのですが、考え方によって価値は、いくらでも変わっていくのではないかと思っています。真珠も然りです。実は襟に真珠を付けています。宇和島産の真珠です。でもただ単に付けているのでは面白くないので、真珠の上にアクセサリーを付けている。これは豚で「豚に真珠」。ちょっとしゃれを効かしたんです。これを付けていると十代の女の子なんかも、皆欲しがるんです。この豚は何ですかと聞かれた時は、これは「愛媛甘とろ豚です。」と言います。でも今日、上島に行ったら、「レモンポークにしてください。」と言われました。なるほどなるほどと。そういう明るさ、前向きな姿勢の所に、人は寄って来るし、可能性が生まれてくるのではないかなと思います。正直言って辛いこともあります。しかし、下を向いても、上を向いても現実は変わらないとするならば、前を向いて行くしかないなと思っています。